

中国科学院昆明動物研究所の昆明動物博物館を訪ねて まつしま よしあき
松島義章 (名誉館員)

2006年3月25日から4月1日まで照葉樹林の自然と文化のルーツを訪ねる「雲南自然観察の旅」に出かけ、雲南省の省都である昆明、13世紀まで大理王国として栄えた大理、そしてミャンマーとラオスの国境に接する雲南省南端部の西双版纳を訪ねました。

大理は大理石の語源となった地名で、大地は大理石（結晶質石灰岩）からできています。大理空港は海拔2,200～2,300mほどの平坦化した石灰岩の山頂に造られた飛行場で、現在も石灰岩を砕石しながら盛んに拡張工事が進められています。海拔1,970mの洱海の西側にそびえる蒼山は、海拔4,000mを越す19峰からなる山脈です。森林限界前の3,000m付近まで松の二次林でその中にシャクナゲとツツジが咲き乱れていました。登山道には緑泥石片岩を主体に種々の結晶片岩が露出しています。3,000m付近からは石灰岩が分布しているのか、石材として大規模に掘削された山肌が麓からも白く見えます。

西双版纳では大河メコンの川下りをしました。3月は乾季で雨が全く降らず水位

が10m近く下がり、景洪からの乗船ができませんでした。そこで下流のガランハへ移動、ガランハからチャーター船にて関墨港まで乗りました。兩岸の岩石は黒褐色化した中部古生層の硬い粘板岩・砂岩・礫岩からなります。川幅は広くても100m前後と狭いV字溪谷となっています。兩岸にそそり立つ急峻な斜面にわずかに残る照葉樹林がみられる以外、焼畑からバナナ畑、ゴム園に変わってしまい、森林破壊を伴う急激な開発が中国最南端まで及んでいることに驚きました。

昆明では先頃、市の郊外から市街へ移転してきた新装の中国科学院昆明動物研究所を訪ねました。正門を入ると左は動物研究所（図1）、右に付属の昆明動物博物館の玄関（図2）が位置していました。玄関では博物館長の染醒財博士に出迎えられ、館内を1～3階まで案内頂きました。

新館の博物館はこの6月に開館のため盛んに展示作業が行われていて、ケース内には展示予定の標本類が運び込まれていました。展示のコンセプトは“生命誕生

40億年史”を取り上げています。展示は3階まであり、吹き抜けのエントランスホールの中には雲南と四川を代表するジュラ紀の4種類の恐竜骨格（レプリカ）が立体的に展示され（図3,4）、博物館のシンボルとなっています。中でも恐ろしいほど伸びた首のマメンチサウルスは、3階のフロアから眺めると頭がちょうど目の前に位置していました。それを取り囲むように竜脚類のジンジャゴサウルスとユンナノサウルス、ルーフェンゴサウルスが配置されています。

1階フロアで特徴となる展示は、当館のジャンボ・ブックと同じ形を取り入れたケースから、飛び出すように製作されたディロフォサウルスをモデルにした食肉類恐竜（図5）と、ステゴサウルスの仲間のトウジャンゴサウルスをモデルとした草食恐竜（図6）が取り上げられています。現世では雲南に生息するアジアゾウの地域個体群で小型のウンナンゾウの1家族（図7）と骨格標本（図8）や、3階の天井まで達する熱帯雨林のジオラマなどがあります。

2階のフロアでは多数のサル類やクマを主体とする哺乳類、多様な鳥類（図9）、分類と生態に工夫を凝らし蜂の巣構造を取り入れたケースによる昆虫類の展示（図10,11）が目立ってきます。

3階のフロアには一部が透明な強化



図1 中国科学院昆明動物研究所。



図2 昆明動物博物館。



図3 マメンチサウルスとその仲間の恐竜。



図4 竜脚類のジンジャゴサウルス（手前）とユンナノサウルス（奥）。



図5 ジャンボ・ブックから飛び出すディロフォサウルスをモデルとした肉食恐竜。



図6 ジャンボ・ブックから飛び出すトウジャンゴサウルスをモデルとした草食恐竜。

ガラスの床となり、1階の熱帯林を中空から樹冠を間近に観察できるようになっています(図12)。高所恐怖症の人にとっては足がすくみ、前に進むことができないかもしれません。一方反対側には熱帯の浅海の様子が大型の魚類をもってジオラマで紹介しています(図13)。このジオラマ前の天井にはコントラストの鮮やかな熱帯魚の複製(図14)を吊り下げて、熱帯の海へ誘導する標示としていました。

館の外、動物研究所の中庭には雲南のメコン下流域に生息する大形ワニの生態復元をおこない、野外展示(図15)となっています。したがってここに取り上げた資料の展示は、いずれも昆明動物博物館を特徴づけるものといえましょう。

館長の染博士の解説を聞きながらジャンボ・ブック展示と昆虫類の展示を見たとき、この展示ケースや標本の展示手法は当館の展示と同じスタイルを取り入れたものではないかと思い、展示施工業者について伺いました。しかし、博士は昆虫の研究者であり業者について答えてくれませんでした。



図7 雲南に生息する小型のアジアゾウ(ウナンゾウ)の1家族。



図8 アジアゾウの骨格。



図9 鳥類の生態紹介を兼ねた分類展示。

各フロアーでは作業員による展示作業が盛んに進められていましたが、解説パネルや解説ラベルなどはまだ全くなく、標本収蔵庫から運び出された資料には個々の標本ラベルがついているだけでした。

展示される予定の多数のサル類や鳥類、さらに大量の昆虫標本はいずれも立派な実物資料ですが、熱帯魚のレプリカと恐竜のレプリカについてはやや粗雑な製法で作られています。なお、展示ケース内に搬入された多数の魚類とヘビ類は、いずれも以前より使用されている一



図10 ハニカム(蜂の巣)構造のケースによる昆虫類の分類と透明な強化ガラスで覆われた生態を展示。熱弁で解説してくれる博物館長の染醒財博士。



図11 カブトムシの仲間とオサムシの仲間? を見せる。



図12 3階フロアーから熱帯雨林の樹冠を眺める。

般的な円筒型ガラス標本瓶に入った液浸標本です。これらの資料をどのような形で展示するのか注目されます。

今回、昆明動物博物館オープン前の展示作業中を特別に見学できました。博物館の学芸員にとって、分り易い展示をする点で如何に工夫し苦勞しているか、その様子を垣間見ることができました。再度訪ねて完成した展示を見学したいものです。



図13 熱帯の浅海のジオラマ。



図14 浅海のジオラマに使われる熱帯魚の模型。



図15 動物研究所中庭にみられるワニの野外展示。

自然科学のとびら
第12巻3号(通巻46号)
2006年9月15日発行
発行者 神奈川県立生命の星・地球博物館
館長 齋藤靖二
〒250-0031 神奈川県小田原市入生田 499
Tel: 0465-21-1515 Fax: 0465-23-8846
<http://nh.kanagawa-museum.jp/index.html>

編集 木場英久
印刷所 文化堂印刷株式会社

© 2006 by Kanagawa Prefectural Museum of Natural History.

